

Devilish hand with Buddhistic heart

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/8584

鬼 手 仏 心

Devilish hand with Buddhistic heart

金沢大学第一外科
渡 辺 洋 宇

私ども外科医は色紙を頼まれると、屢々『鬼手仏心』と書く。外科医は鬼のような荒々しい手を持っていても、仏様のような優しい心で手術をするという意味である。しかし、辞書で「鬼手」の項を見ると、「囲碁・将棋で人の思いつかない奇抜な手。その手で大きく形勢が変わった時などにいわれる」とある。

外科治療はもとよりこのような鬼手や奇手であるわけがない。古代文化以来、それぞれの時代の需要に応じて可能な外科治療が考案されてきた。古代インドでは姦通罪などの破戒に対して鼻をそぎ落とす刑があり、鼻の形成術が発達した。外科治療への需要の最たるものは、いつの時代でも「戦傷の治療」であったことはいうまでもない。古くはエジプト時代には戦傷での四肢切断、異物除去、創処置などがパピルスに記されている。ヒポクラテスの業績でも傑出しているのは戦傷の外科である。外用薬、包帯、骨折、脱臼などの治療をし「外科を志す者は戦争に行くべきである」と極論している。彼はまた「薬で治らないものはメスで治る、メスで治らないものは火で治る。しかし、火で治らないものは不治のものといわなければならない」としている。創口を焼灼（煮えた油を注ぐか、真っ赤に熱した鉄の棒を突っ込む）して治療するのが唯一の方法であった。患者（兵士）に大変な苦痛を与えたこの『鬼手仏心』の手法は中世のパレの時代まで永く続くことになる。

近代外科学の父といわれるアンブロアズ・パレ（1510?–1590）も戦時外科医から名をなした。彼は貧しい床屋外科医から身を起し遂にフランス国王の侍医になった（その生い立ちから正確な生年月日は不明であることから、異例にも没後400年の記念祭が1990年に行われている）。床屋外科医とは医療従事者の中では最も低い地位の呼び名であった。当時の医学界は医学校出身者が支配していたが、彼らの多くはキリスト教の僧侶や修道士であった。「聖職者は手は血や膿で汚してはならない」という教義に従い、彼らは次第に医療の現場から手を引き、その代わりに下請けに働くようになったのが床屋であった。

パレは外科学に数知れぬ貢献をしたが「優しい外科医」と呼ばれる。まさに現代風の『鬼手仏心』の元祖と

いえる。彼は患者に苦痛を与えないで治療することを目指したからである。戦傷での体内からの弾の取り出し道具などの考案に始まり、彼を最も有名にしたのは創傷処置法と血管結紮による止血法の考案である。まず彼はそれまでの創傷の焼灼法を止め、煮えた油の代わりに卵黄とテレピン油とバラ油を混ぜて軟膏を作り創口に注いだ。これにより傷病兵の苦痛を著しく軽減しえたという。また彼は四肢の切断に際し、血管を糸で結紮して止血する方法を普及させた。英国のハーヴェイが血液循環説を発表するのが1628年であるから、パレの血管結紮法はそれより随分前のことになる。

それぞれの時代に様々の『鬼手仏心』が存在し、それは枚挙の暇がない。しかし何といても現代外科が大きな恩恵を受けたのは、無痛で手術が行える全身麻酔の登場である。マサチューセッツ総合病院でモートンがエーテル麻酔の公開実験を行ったのは1846年10月である（今でも同病院に ether-dome として保存されており、著者も留学中ここを訪れ、深い感銘を覚えた）。外科医は無痛のもとでの『鬼手仏心』を行えるようになったのであり、以後、現代外科学は飛躍的な進歩を遂げ、患者も外科医もその恩恵を受けることになる。

過去のいずれの時代でも施行されず、現代医療が可能にしたのは「移植医療」である。わが国の移植に関する基礎的研究は世界のトップレベルにある。しかし残念ながら臨床移植は日本は明らかに後進国である。特に心臓、肺臓、肝臓など移植先進国で通常行われている臓器移植が、わが国ではできないまま既に長年月が経過し、移植後進国となった。その結果、患者は移植医療が可能な医療施設を求めて国外を訪れることになった。しかし、最近これら移植先進国でも当然のことにドナーの絶対数不足が生じてきた。このため、これらの国では、移植のレシピエントには自国の患者を優先させるという法令ができつつある。いまや日本人は臓器提供が可能な国を求めてさまよう「移植難民」の状態である。このような中、議員立法で『臓器の移植に関する法律案』が上程され、また関連学会も早期成立を願って要望書を提出している。日本の外科医が移植医療の場で『鬼手仏心』を発揮できる日が近いことを願っている。